本を供覧する。固定包埋には 10%ホルマリン及びパラフィンを用い、染色はヘマトキシリンエオジン (H. E.) 及びワンギーソン染色を行つたが、筋肉は H. E. で赤く、腸管は紫、卵は赤い顆粒状、卵殻は紫に、其の他の体部は紫に染るがキチン質及び排泄物、体毛は染らず、又筋肉はワンギーソンで黄褐に染め得る。然し之をダニとして認める事は、特定の場合を除き困難な事が多く、特に組織中にある時は一層其の識別は困難となり細心の注意と熟練を以て検査に臨む必要がある。

〔広島医大上村外科〕

北海道に於けるダニの外聴道内侵入の例に就て

犬飼 哲夫

Inukai, T.: A case report of invasion of a tick into the ear

北海道で従来家畜及び人間につくダニの種類は次の 7 種とされている：*Ixodes ricinus* L. タネダニ；*Ixodes frequens* Ogura et Takada エゾマダニ；*Ixodes persulcatus persulcatus* Schulze；*Haemaphysalis bispinosa* Neumann フタトゲマダニ；*Haemaphysalis concinna* Koch；*Haemaphysalis jezoensis* Ogura et Takada；*Dermacentor reticulatus* (Fabricius) アミメダニ；この最後のアミメダニ、及びタネマダニの二種が人間に最も多くつくダニである。北海道釧路方面では毎年 5 月下旬から 6 月上旬にかけて 10 歳位の児童の外聴道内にこのダニが寄生する例が見られる。寄生当初は何等認知しないが、やがて吸血して外聴道で膨み疼痛を訴えて医師の元に来るのであるが、外部から見ると外聴道が紫赤色のはれ物の如く完全に塞がれている。多くの場合ダニは外聴道内で外側より $\frac{2}{3}$ 位奥に附着している。この際綿棒の先に 1%の沃度チンキをつけてダニに接触すると簡単に脱落する。さて如何にして外聴道内に侵入するかと云うに、毎年斯る例が釧路市耳鼻科の上田五郎氏の所では数例は見られるが、大人には極めて稀で、学童の 10 歳位迄の野外に遊ぶ頃で、5 月下旬から 6 月上旬で野外にワラビ、フキ、ウド等の食用野草採取のためや、スズランの咲く頃等に野外に最も多く出る子供に多い。このことから児童が野外で草の中にいる間に附着したダニが、偶然にも外聴道内に侵入したことは明らかで、初夏の頃笹地を歩いて 1 日に 36 匹のダニを下衣から取つたことがある。眞夏には外聴道に入る例はない。釧路地方ではこのダニによる他の病状はまだ見られ

ないが、肛門附近について外痔核と見誤つた例は往々にある、

〔北大農学部〕

恙虫口器の形態学的及び組織学的所見

小畑 義男

Obata, Y.: Histological studies on the mouth part of Tsutsugamushi

恙虫幼虫が、其宿主である温血動物から、食物を攝取する際に、宿主の皮内に一つの管状硝子様物質を形成する。此の管状物が Organ であるか、分泌物の凝固したものであるか、将又変性上皮組織内に生じた組織の穴に過ぎないか等論議されて来た所であるけれども、此の問題に関する実験報告は甚だ少ない。此の管は、恙虫が病原体を人体へ感染せしめるにしても、他方に於ては無毒幼虫が感染動物から病原体を取り入れるにしても、常に口器の先端にあつて病原体出入の門戸であるに違いない。演者は宿主の上皮組織内にある硝子様管状物を組織学的に検索した結果、一部は恙虫の Organ であると云う所見を得た。実験方法は恙虫の極めて多数吸着した *Microtus montebelli* を捕獲し、吸着部位である耳殻を切取つて、アルコール・10% フォルマリン・ルゴール等の固定液を用いて、パラフィン・ゲラチン・ツェロイジン等の切片を作り、H. E. 以下 26 種の染色法を行つて管状物 (hypopharynx) の組織化学的並に形態的観察を行つた。此の結果最外部に上皮組織の退行変性と遊走細胞の侵出した外相 (第一相) があり、此の硝子様管状物が見られる。之も外部 (第二相) 中部 (第三相) 管内壁 (第四相) の三相に分ける事が出来て、各相は染色態度が各々異なる。第一相は、*Trombicula intermedia* の場合は退行変性が主で遊走細胞は少ない。然し *T. akamushi* は前者の逆であり、恙虫の種類に依つて炎症の程度が異なる事を示す。第二相で *T. intermedia* の場合、マロリーのアザン染色で青く、ワンギーソンでは赤く染まり、一見した所上皮細胞層内に出来た結組織性硝子様物質と思われる像である。他方 *T. akamushi* の第二相はマロリーで青く染まらず orange に染まり、ワンギーソンでは赤く染まつて、両恙虫の間に僅かの差があるに過ぎない。第三相は両恙虫ともマロリーで赤く、ワンギーソンで黄色に染まる。第四相は染色上多くの場合難染性で屈折性を帯びる。然しレバデチー、ビルシヨウスキー等の鍍銀法では常に黒染して嗜銀性を示し、屢々恙虫の口腔と連結して居るので此のものは Organ として考えたいが、他